

示II-273 混合型肝癌切除例の臨床病理学的検討 慶應義塾大学一般消化器外科、病理診断部*

篠田昌宏、島津元秀、上田政和、若林 剛、
加藤悠太郎、池田 謙、板野 理、首村智久、
亀山哲章、浦上秀次郎、向井万起夫*、北島政樹

【目的】過去14年間に経験した混合型肝癌(MHC)6
切除例の臨床病理学的特徴について検討した。

【結果】1984年～1997年の14年間に切除された原発
性肝癌245例中、肝細胞癌232例(94.7%)、胆管細胞
癌8例(3.3%)、MHC6例(2.4%)であった。3例
はHBs抗原陽性、2例はHCV抗体陽性で、慢性肝炎ま
たは肝硬変を合併していた。1例がHBs抗原、HBC抗
体とも陰性で、正常肝であった。術前血清AFPは1例、
CA19-9は3例、CEAは1例で上昇していた。TNM分
類ではStageIIが1例、IIIが4例、IV-Bが1例。病理学
的には被膜浸潤を3例に、血管浸潤を2例に、肝内転
移を2例に、リンパ節転移を1例に認めた。MHCの
予後は、1年生存83.3%、3年生存33.3%と不良であ
った。術後平均生存期間は22.3ヵ月、最長生存期間は
3年9ヵ月であった。再発部位は肝内のみならず、リン
パ節転移、胸腹膜播種、他臓器浸潤、転移など肝外
再発も多くみられた。

【結論】MHCは術前診断が困難で、予後不良であ
った。再発形式として肝外転移も多くみられた。

示II-274 肝細胞癌の臨床病理学的検討 術前AFP値と悪性度の関係について

神奈川県立がんセンター外科4科、三浦市立病院外科*
宮松篤*、森永聡一郎、赤池信、杉政征夫、武宮省治

【対象と方法】対象は86年4月から96年12月までの肝
癌切除例のうち113例。腫瘍径、分化度(Edm)被膜浸潤
(fc-inf)門脈内腫瘍塞栓(vp)肝内転移(im)及び術後生存日
数について術前AFP正常(15ng/ml以下)A群42例、高値
(15-1000ng/ml)B群57例、超高値(1000ng/ml以上)C群14例
に分け検討した【結果】1.全症例では腫瘍径2cm未満
14例12.4%、2-5cm56例49.6%、5cm以上43例38.1%でC群
では各々0例0%、6例42.9%、8例57.1%であった。2.分化
度はEdmI1例9.7%II75例66.4%III24例21.2%IV3例2.7%
でC群では各々1例7.1%11例78.6%1例7.1%1例7.1%であ
った。3.fcinf(+):59例52.2%(-):54例47.8%でC群では(+):9
例64.3%(-):5例35.7%であった。4.vp(+):33例29.2%(-):80
例70.8%でC群では(+):5例35.7%(-):9例64.3%であった。
5.im(+):34例30.1%(-):79例69.9%でC群では(+):4例28.6%
(-):10例71.4%であった。6.平均生存日数はA群1206.4
日、B群1156.1日、C群830.9日であった。【結論】AFP超
高値群ではEdmIIの症例が多くim(+):は少なかったが
fcinf(+),vp(+):は高率でありAFP産生能と悪性度の関連
が示唆された。

示II-275 肝細胞癌切除例における異時性多中 心性発癌と肝内転移再発について

兵庫医科大学第一外科¹⁾、同病院病理²⁾、同第二病理²⁾
高田勝史¹⁾、山中若樹¹⁾、田中恒雄¹⁾、田中渉¹⁾、山中潤
一¹⁾、安井智明¹⁾、岡本英三¹⁾、八十嶋仁²⁾、植松邦夫³⁾

【目的】肝細胞癌切除後の再発病態を考察。【対象・方法】
'81-'95年に肝細胞癌の肝切除512例を対象に発育・進展
様式、再発巣、再発部位、背景肝、ウイスマーカ別の検討。【結果】
1)径3cm以下202例中、多中心性発育型14%。2)径5cm以下
治療切除例のvp,im(-);67例とvp or im(+);83例の無再発生
存率を比較。異時性多中心性発癌は術後5年で58%。3)径
≤2cm単発再発の49生検例中65%は高分化型。異時性多
中心性発癌は近接亜区域48%、対側葉52%。4)vp,im(-);111
例の線維化を除くHAI scoreの5≥群と5<群で無再発生
存率を比較。5≥群が有意に再発率は低い(p<0.05)。5)
'90年6月~症例をHCVAb+HBsAg-(HC群;142例),HCVAb-
HBsAg+(HB群;29例),HCVAb-HBsAg-(NBNC群;21例)の
3群に分け、vp,im(-)症例の5年無再発生存率はHB,NBNC
群はHC群より有意に良好(p<0.05)。HC群のHAI scoreは
他群より高値。【結語】1)同時性多中心性発癌例は14%、
異時性多中心性の再発率は年次12%。2)多中心性発癌の
再発は初発巣の占拠部位に影響なかった。3)多中心性
発癌は非癌部の炎症の高いC型関連肝癌に高かった。

示II-276 自然退縮した転移性肝癌の組織中腫瘍 増殖因子濃度の検討

三重大学第二外科

大倉英司、三木誓雄、木下恒材、伊藤秀樹、小野 拓、
石島直人、松本好市、鈴木宏志

大腸癌肝転移病変の自然退縮例の1例の切除標本を
用いて組織中腫瘍増殖因子量を測定し、興味ある知見
を得たので報告する。【症例】:61才男性。平成9年
3月下旬直腸癌、肝転移(H1)の診断にてMile's op.肝
部分切除術施行。組織学的にいずれも腺扁平上皮癌で
あった。初回手術4ヵ月後CTにて残存肝に多発性の
転移病変の再発(H3)が認められ、6ヵ月後にはさらに
病変は増大し、全身状態も悪化した。9ヵ月ごろより
全身状態が徐々に改善し、CTにて肝転移巣が著明に
退縮していることが判明した。【組織中腫瘍増殖因
子濃度の検討】:腫瘍増殖因子であるIL-6、HGF、
VEGFの原発巣、肝転移巣の組織中濃度を測定した
ところ、肝転移巣においてIL-6、HGFは原発巣より
高値を示していたのに対し、VEGF値は低値を示し
ていた。一方原発巣の検討では、本症例のHGF値は
他の大腸癌原発巣36病変の平均HGF値に比し著明
に低値であり、これらの組織中増殖因子のアンバラン
スが自然退縮に関連している可能性が示唆された。